

# 平成 29 年度 第 1 回 観察会 記録 (自主観察会)

日 時	平成 29 年 4 月 9 日 (日)
観察地	佐賀県太良町 NPO 法人シニア自然大学校 自然学講座アサリ再生実験区
講 師	田中 克 京都大学名誉教授 当講座コーディネーター
テーマ	アサリ再生実験区におけるアサリ生育状況の確認
備 考	参加者 12 名

## 1. 観察会の目的：

佐賀県太良町の漁師 平方宣清さんのアサリ増殖場の 1 区画を「自然学講座アサリ再生実験区」として借用、環境改良剤キレートマリンのアサリの生育に及ぼす影響を予備的に確認し、今後の活動の知見を得る。

## 2. 実験方法

(1) 実験区面積：100 平方メートル。

(2) 実験方法：上記を 2 区画にわけ、1 区画にキレートマリン散布、対照区は散布無。表面を網で覆い、魚類や水鳥の食害を防ぐ。

キレートマリン散布実施日：平成 28 年 10 月 18 日

散布量：6 kg / 50 平方メートル

キレートマリンタイプ：スペラキレートマリン（即効性が期待される鉄と竹炭とキレート材として柑橘類の残渣を混ぜて固めた環境改良剤。一粒は 1 cm 前後の粒。環境省が優れた環境改良剤として認定）

(3) 一定期間経過後のアサリの個体数と大きさを比較し、キレートマリン散布効果を確認する。

(4) 標本採取

① キレートマリン散布区と対照区の 1 個所に鉄枠 (25×25 cm) を置く。(本来は 3 個所以上必要)

② 枠の中の貝、砂、泥をスコップで掘り出し、篩（メッシュは径 9 mm と 2 mm）に入れ、水中で泥、砂とアサリを篩い分ける。

③ 篩い分けたアサリを篩い（粗・細）別にポリ袋に収納。

④ 標本を水道水で洗浄、水切りして卓上に広げ、生きているアサリと貝殻をより分ける ⇒ 標本

(5) 計測

① キレートマリン散布区と対照区のアサリの個体数。

散布区 153 個体 (1 m<sup>2</sup> 換算約 2400 個) 非散布区 66 個体 (1 m<sup>2</sup> 約 1100 個)

② アサリの殻長、殻高、殻径をデジタルノギスで測定し記録。

2 群の最大値、最小値、平均値、モードなど、データを後日田中克先生から提供希望。

## 3. 結果・感想

(1) キレートマリン散布群の検出個体数が無の群の 2 倍以上多く、散布効果が顕著であるように感じた。

次回は標本をそれぞれ 3 群採取し、統計的に有意差を検定してみたい。そのためには採取用具、計測用具（デジタルノギス）の購入が必要であるが、購入費用を工面し実現したい。

(2) アサリの生態や生活史など、アサリという生きものを理解する勉強会を行なうことで、このプロジェクトに対する講座生全体の関心を高めたい。

#### 4. アサリ 標本採取→選別→計測



平方さんのアサリ養殖場    アサリ再生実験区（左キレートマリン散布、右散布なし）    鉄枠（25×25 cm）を置き



スコップで枠内を掘り、篩いに入れて水溜まりで砂、泥、貝を篩い分ける。

選別作業

選別結果    SCM 散布    153 個



SCM 散布なし 66 個

選別したアサリの 3 サイズ（殻長、殻高、殻径）をデジタルノギスで測定、記録



\*\*\*\*\*



アサリはみんな  
アーティスト！！





## アサリ収穫祭

午後 1 時半くらいまで陸上で潮が引くのを待ち、1 時半ごろから潮干狩りをはじめました。



←自然学講座メンバーも  
大奮闘。



上：西日本新聞社の取材に応える御旅屋さん



有明海を撮り続ける写真家  
中尾勘悟さん



昼食のカレーを仕込んだデッカイ鍋

カレーを美味しくいただくファミリー

潮が引き、潮干狩り開始



上：穴はアサリの通気口



こんなものも収穫

中：ミドリシャミセンガイ

右：タコ



楽しかった潮干狩りも午後 4 時ごろには潮が満ち  
挨拶で締めくくりました。

↑ 沢山アサリが獲れました。今年は大豊作。



始め、陸に上がり田中先生と平方さんの





ホテルに持ち帰ったアサリの計測が午後7時後終り終わり、食事会へ。



午後7時、アサリのサイズ測定が終わり夕食会。テーブルにご馳走がならびました。司会は藤原さん。全員が一言スピーチで感想や田中先生、平方さんへメッセージを伝えました。田中先生、平方さん、内山さん、SPERAのスタッフの皆さま、ありがとうございました。



**おわりに：**天侯に恵まれ、アサリ実験区の観察と約60人が参加した収穫祭が終了した。キレートマリンを散布した区域のアサリ生息数は1平方メートル当り推計2400個と、非散布の区域の約1100個の2.2倍で、明らかに効果があるように思われた。長年の田中先生はじめ、平方さん及びSPERAの皆さまの努力が実り始めたことを実感した1日であった。私達シニア自然大学校の自然学講座が参画することになってから初めての現地観察会であったが、現地の私達に対する期待の大きさを直接に感じることもできたことも、収穫の一つであった。現在はまだ非力ですが、将来有明海の再生に何らかの貢献が出来る力を養いたいと思った一日でした。(飯田記)

# 潮干狩り 海の「収穫祭」 太良沖の有明海

潮干狩りをする家族連れ。袋はアサリでいっぱいになった。太良町大浦沖の有明海



太良町沖の有明海のアサリ漁場で9日、「収穫祭」があった。20年前、国営干

拓事業で護国湾(長崎県)が閉め切られた後、湾口部に近いこの漁場のアサリも

一時は死滅したが、干潟の再生実験を進め、潮干狩りが楽しめるようになった。約60人の参加者は海の恵みに感謝し、「宝の海」の再生に思いをはせた。

再生実験は、護国湾干拓の潮受け堤防から北東約10㌔にある太良町の漁場約850平方メートルで行われている。漁師の平方宣清さん(64)の協力を得ながら、田中克・京大名誉教授(水産生物学)が、福岡県柳川市の住民グループ(現在のNPO法人「SPERRA森里海・時代を拓く」)・内山里美理事長とともに2011年4月から始めた。

この漁場では一時期、年間1500万円の水揚げがあったが、「干ロチン」と称された1997年4月の湾閉め切り以降、赤潮の発生が頻発し、アサリがまったく採れなくなっ

た。田中名誉教授らは11年か

「E」 ONLY

22・23・8146  
22・24・8032  
22・25・8146

22・72・3766  
22・73・3766

22・83・2016  
22・84・2016

22・22・8958  
22・23・8958

22・23・2583  
22・24・2583

のご用は

(7・218)  
22・22・0813

22・23・6221  
22・24・6221

22・22・0878  
22・23・0878

天気

22・12・100